

平成23年7月7日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2011年度（第26回）大同生命地域研究賞  
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）では、標題の研究賞について、本年度の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を開催いたしますのでお知らせいたします。なお、受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成23年7月22日（金）午後2時～

場所：社団法人 クラブ関西

大阪市北区堂島浜1-3-1 1 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1）大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

龍谷大学現代インド研究センターセンター長 長崎 暢子 氏

2）大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

神戸大学大学院国際文化科学研究科教授 窪田 幸子 氏

京都大学東南アジア研究所助教 小林 知 氏

3）大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

非電化工房代表・日本大学工学部客員教授 藤村 靖之 氏

以上

照会先：公益財団法人大同生命国際文化基金 事務局（北迫）  
電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

2011年7月

## 大同生命地域研究賞について

### 1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険株式会社の創業80周年記念事業として、外務大臣認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

### 2. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

#### (1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

#### (2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みた研究者2名（地域研究賞の該当者がいない場合、3名とすることも可）に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

#### (3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

### 3. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。  
2011年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

総合地球環境学研究所教授	秋道 智彌 氏
財団法人自然環境研究センター理事長	大塚 柳太郎 氏
国立民族学博物館教授	小長谷 有紀 氏
政策研究大学院大学教授	原 洋之介 氏
坂の上の雲ミュージアム館長	松原 正毅 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2011年度

大同生命地域研究賞受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞 (副賞300万円ならびに記念品)

「南アジア地域研究の総合的発展への多大なる貢献」に対して

龍谷大学現代インド研究センターセンター長 ながさき のぶこ 長崎 暢子 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「アボリジニ研究の新たな展開と「先住民」研究の構築への貢献」

に対して

神戸大学大学院国際文化学研究科教授 くぼた さちこ 窪田 幸子 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「ポル・ポト時代以後のカンボジア農村社会を対象とした地域研究」

に対して

京都大学東南アジア研究所助教 こばやし さとる 小林 知 氏

◆大同生命地域研究特別賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「地域環境を保全する経済の構築に関する貢献」に対して

非電化工房代表・日本大学工学部客員教授 ふじむら やすゆき 藤村 靖之 氏

2011年度  
大同生命地域研究賞

長崎 暢子 氏  
(龍谷大学現代インド研究センター  
センター長)

## 略 歴

長崎 暢子(ながさき のぶこ)

1. 現 職 : 龍谷大学 現代インド研究センター センター長 (研究フェロー)  
〔勤務先電話番号 075 (343) 3809〕
2. 最終学歴 : 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退 (1964 年)
3. 主要職歴 : 1964 年 東京大学東洋文化研究所助手  
1976 年 東京大学教養学部助教授  
1987 年 東京大学教養学部教授  
1998 年 龍谷大学国際文化学部教授  
2008 年 龍谷大学研究フェロー  
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
  - ①『南アジアの民族運動と日本』(編者)〔アジア経済研究所 序 (pp.1~3), 及び pp.1~61, 1979 年 3 月〕
  - ②『インド大反乱』(単著)〔中央公論社(全 232 頁), 1981 年 3 月〕
  - ③『インド独立—逆光の中のチャンドラ・ボース—』(単著)〔朝日新聞社(全 288 頁), 1989 年 10 月〕
  - ④『現代アジア論の名著』(編共著)〔中央公論社, pp.1~7 編集解説, 及び pp.160~172, 1992 年 9 月〕
  - ⑤『ガンディー—反近代の実験—』(単著)〔岩波書店(全 221 頁), 1996 年 4 月〕
  - ⑥『自立へ向かうアジア』(共著)〔中央公論新社「世界の歴史 27 巻」, pp.207~423, 1999 年 3 月〕
  - ⑦『タゴールとガンディー再発見』(共著)〔法蔵館, 2002 年〕
  - ⑧『現代南アジア 1 地域研究への招待』(編著)〔東京大学出版会, 2002 年 9 月〕
  - ⑨『南アジア史』(共著)〔辛島昇編, 山川出版社, 2004 年 3 月〕
  - ⑩『インド: 国境を越えるナショナリズム』〔岩波書店 (全 163+5 頁), 2004 年 11 月〕
  - ⑪(ed.)*Democracy and Development in South Asia: East Asian Comparative Perspectives*〔Ryukoku University, Kyoto, 282p., 2005〕
  - ⑫*The International Context of Conflicts in the Middle East and Asian Approaches to Conflict Resolution*, Nobuko Nagasaki et al. eds.〔Ryukoku University, Kyoto, 229p., 2006〕
  - ⑬『資料集: インド国民軍関係者聞き書き』(共編著)〔長崎暢子・中村尚司・田中敏雄・石坂晋哉編, 研文出版, 412p., 2008〕
  - ⑭『資料集: インド国民軍関係者証言』(共編著)〔長崎暢子・中村尚司・田中敏雄・石坂晋哉編, 研文出版, 630p., 2008〕
  - ⑮『自立へ向かうアジア』(共著)〔長崎暢子・狭間直樹, 中央公論新社「世界の歴史 27 巻 増補中公文庫版」 pp.241~476, pp.485~527, pp.539~548, 2009 年 9 月〕
  - ⑯『暴力と非暴力: 紛争解決: アフラシア叢書 1』(編著)〔ミネルヴァ書房, 402 頁, 2010 年 3 月〕
5. 備 考 : 1993 年 博士 (文学) (東京大学)

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

## 業績紹介

「南アジア地域研究の総合的発展への多大なる貢献」に対して

紹介者： 田辺 明生 たなべ あきお

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 教授)

長崎暢子先生は、近現代インド史を中心とする総合的な南アジア地域研究に従事してこられました。長崎先生のご研究の特徴は、国際関係や政治経済から地域文化やジェンダーに至るまでの非常に幅広い視野をもって総合的な視角から南アジア地域を把握しつつ、その全体的な構造変動を歴史的にとらえようとされたことです。方法論的には、政治経済研究と文化社会研究、また歴史学と地域研究を架橋されたパイオニアであり、真に総合的な南アジア地域研究のための礎を築かれたといえるでしょう。

長崎先生のご研究は非常に多岐にわたりますが、そのなかでも特に重要なお業績はインドの民族運動についてのご研究です。インドの民族運動にご興味をもたれた背景には、戦後日本の占領期のご経験があるとうかがっています。アジア諸国の植民地支配をしていた日本が政治的な独立を戦後一時的に失う一方、長期間にわたって植民地支配を受けていたインドはいかにして名誉ある独立をかちとったのかという同時代的に尖鋭な問題意識がその研究をつらぬいており、その視座はおのずからアジア諸国間の連鎖と比較を含むものとなっています。こうした視座は、南アジア地域研究の意味を日本との関係においてとらえようとする長崎先生の一貫した学術的態度ともつながっています。そしてまた同時代的な問題意識を持ち続けられた先生は、時代の変遷とともに、問いと視角をさらに深められていくこととなり、静かにしかし確実に、常に南アジア地域研究の最先端をリードされてこられました。

インドの民族運動についての初期のご研究は最初の単著『インド大反乱』(1981年)としてまとめられました。「インド大反乱」は、英国側からは「セポイ兵による裏切り」の反乱として、またインド側からは「第一次独立戦争」としてとらえられていましたが、長崎先生は、その民族的反乱としての意義と限界を、中立的な立場からしかし歴史史料に密着しつつ克明に分析されました。それまで一般的だった「セポイの反乱」にかわり、「インド大反乱」という用語が現在歴史学的に受け入れられているのは、この書によるものです。なおインド大反乱については、その後も、「インド大反乱と情報伝達」(1990年)「インド大反乱と国民形成」(1994年)などの諸論文で新たな研究を展開されてこられました。

インドの独立に至る民族運動についてのご研究は、『インド独立—逆光の中のチャンドラ・ボース—』(1989年)として、またさらに総合的な視点から『自立へ向かうアジア』(1999年)という近代インドの通史としてまとめられました。この本が、2009年に補筆され文庫本として再版されたことは、このご著書に対する高い評価を示すと言えるでしょう。

インドの民族運動のご研究は、独立運動を導いた M.K.ガンディーの研究へと導かれました。先生は、ガンディーの思想と運動のもつ意味を歴史的観点から深く考察され、その結果を名著『ガンディー—反近代の実験—』（1996年）としてまとめられました。本書によって長崎先生は、日本におけるガンディー研究の第一人者としてのゆるぎない地歩を築かれました。長崎先生のガンディー研究の特徴は、ガンディーの思想の根幹をおさえつつ、それを単一枚岩的にまとめるのではなく、むしろガンディーのひとつひとつの言葉と行動の意味を、それが発せられ為された時代的・政治状況的文脈のなかで読み解こうとされたことです。これにより、ガンディーの思想と運動の理解は、大きく進展しました。

ガンディーがいかにして、宗教やカーストや階層がことなる多元的社会集団をまとめあげ、非暴力によって民族独立をかちとったのか、という問いは、多元的共生社会の条件は何か、また、非暴力という方法は紛争解決に有効なのか、というより一般的な問題としてさらに奥深く探求されていくことになります。それは後述する通り、長崎先生をリーダーとする組織的な大型共同研究として展開されていきました。

一方、南アジアを日本との関係においてとらえようとする問題意識は、日本人のインド観、また日本と南アジアとの歴史的関係についての一連の優れた業績を生みだしました。「大川周明の初期インド研究」（1978年）、「日本のアジア主義とインドの民族運動」（1978年）、「インド国民軍の形成—バンコク決議まで—」（1979年）、『南アジアの民族運動と日本』（1979年）、「インド国民会議派の活動と日本」（1980年）、「ラーシュ・ビハリー・ボース考」（1982年）、「自由インド仮政府をめぐる」（1991年）、「第二次世界大戦中の日本とインド」（1992年）、「東南アジアとインド国民軍」（1993年）などのお仕事は、非常に早い時期に、南アジアと日本の知的・政治的・歴史的関係を問おうとした画期的な意義を有しており、現在に至るまでこの研究領域において超えられていないスタンダードを後進に示しています。

さらに、インド国民軍に関わった日本人にインタビューを行い、オーラルヒストリーの重要な資料として、労作『資料集：インド国民軍関係者聞き書き』（2008年）と『資料集：インド国民軍関係者証言』（2008年）をまとめられましたことは特筆に値します。これらは日本がアジア・太平洋戦争で果たした役割について歴史認識を深めるために非常に貴重な一次資料となっており、国際的な注目を集めるに至っています。

長崎先生はまたジェンダーの領域についても、『サリーの女たち』（1975年）「サロージニー・ナイドゥーインド独立運動に身を挺して闘った天才詩人—」（1983年）「20世紀のインド社会と女性」（1997年）「躍動する女神たち—インド人の女性観と歴史—」（1997年）におけるように先駆的で貴重なお仕事をなさっています。またサバルタン研究が出始めた1980年代半ばにすぐにその重要性に着目されて、「民衆運動における“派閥”」（1986年）や「サバルタン・スタディ・グループの研究について」（1987年）において、その研究動向を紹介し、その意義についてきわめて先駆的に論じられています。長崎先生は、南アジア地域におけ

る最先端の研究動向にも常に敏感でありつつ、同時にぶれない問題意識と分析視角をもたれつづけました。

インドの民族運動を地域的な連鎖と比較のなかでみていこうとする視角は、その後、ナショナリズムのトランスナショナルな性格への着目へと結びついていきます。グローバルなネットワークからなるナショナリズムとネーションという視点から、近現代インドを論じなおしたご研究が、名著『インド—国境を越えるナショナリズム』（2004年）です。これは卓抜したインド論であるだけでなく、近代ナショナリズムの歴史的意味と運動組織のありかたを、グローバル時代の現代から問い直す画期的な作品でした。

長崎先生の優れたご業績は、素晴らしい個人研究だけでなく、教育者として多くの若手研究者を育成されてきたこと、また卓越したオーガナイザーとして大型プロジェクトを主導されてきたことにあります。このことは、先生のもとに育った数多い若手研究者の存在、先生のリーダーシップのもとにまとめられた数々の研究成果、また、創設を主導された研究組織とネットワークの存在によって示されています。

教育面で言うと、長崎先生は、長年にわたり、東京大学教養学部ついで龍谷大学国際文化学部において、多くの南アジア地域研究者を育成されました。先生の薫陶を受けたものたちの多くが現在南アジア地域研究において中堅的な役割を果たすに至っています。

また研究教育プロジェクトを進めるにあたって、少しでも多くの研究者が、その置かれた状況の有利・不利に関わらず、南アジア地域研究に参加できるよう、さまざまな制度的な努力と工夫をなされてこられたことも強調しておく必要があります。長崎先生は、自分の指導学生だけではなく、常に日本全体の南アジア地域研究の推進をめざし、南アジア研究をめざすどんなひとにも支援を惜しまれませんでした。先生の有形・無形の激励と支援によって、地方在住者、女性、若手などの必ずしも研究環境上恵まれているとはいえないひとびとが、南アジア地域研究に参加する新たなチャンスを与えられ、多くの人々が育っていきました。これは、先生が学術的に多元的共生社会への発展モデルを追求されると同時に、そうした学術的探究を自らの社会的実践とつなげようとされた試みでした。

長崎先生が南アジア地域研究の発展に果たされた特筆すべきご功績として、文部科学省科学研究費特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク—多元的共生社会の発展モデルを求めて」（1998～2001年）のリーダーとして、日本の南アジア地域研究における初の大型プロジェクトを主導されたことがあげられます。このプロジェクトは、長崎先生のリーダーシップにより、南アジア研究者の学際的・間代代的・全国的な対話と南アジア地域の総合的な理解に大きく貢献した、画期的な事業であったと評価できるでしょう。このプロジェクトでは、1980年代以前のインド研究の枠組を相対化し、1990年代以降の南アジア世界の新たな動態を理解することに重点がおかれしました。早い時期に1990年代の南アジアの歴史の変換を問題にし、現在に至るその後の南アジア地域研究の議論の基盤をつくったこととなります。また、本プロジェクトをつうじて、環境やジェンダーの問題、そして環インド洋や世界システム論という視点を新たに可視化された点にも大きな貢献がありました。このプロジェクトによって結実

した叢書『現代南アジア』（全6巻）（2002年）は、南アジア地域研究の全体を眺望できる唯一の書物となっており、現在に至るまで、南アジアに興味をもつ市民や南アジア地域研究者がまず参照すべき最重要の文献となっています。

また龍谷大学で、長崎先生は、国際文化学研究科研究科長（2000年4月～2002年3月）を務められた他、アフラシア平和開発研究センターの初代センター長（2005年4月～2008年3月）として、当センターにおける研究事業の構築と推進にご尽力されました。アフラシア平和開発研究センターは、文部科学省私学助成学術フロンティア事業（AFC）による「紛争解決と秩序・制度の構築に関する総合研究－アジア・アフリカ研究の地平から－」の共同研究プロジェクトの主体となる研究組織として、龍谷大学に新設されたものです。このアフラシア平和開発研究センターにおける共同研究プロジェクトは、「文化理解や対話による紛争予防のプロセス」を明らかにするとともに、武力的な紛争が起きた後の和解・共生についての政策提言を目的としたものでした。そこでは長期的な解決である和解・共生への道を歩むために、普遍的・画一的な国際関係理論・国際経済理論を超える学際的なアプローチを探究されました。

その成果を世に問うために、『アフラシア叢書』を創刊し、その第一巻として『暴力と非暴力 紛争解決』（2010年）を出版されておられます。この本は、紛争解決のための非暴力の可能性という長崎先生の長年の課題と視角を、アジア・アフリカ諸地域の事例から、紛争解決・和解へ向かう理論と方法というより一般的な問題として論じたものです。アフラシア平和開発研究センターにおける共同研究プロジェクトをつうじて、「文化理解や対話による紛争予防」という新たな研究領域を推進され、さらには、国際交流や若手育成の側面においても多大な貢献をなされました。

さらに、人間文化研究機構「現代インド地域研究」推進事業においても、龍谷大学に新たに設置された現代インド研究センターのセンター長（2009年4月～現在に至る）として、研究推進と若手育成を主導されておられます。先生のリーダーシップのもと、龍谷大学現代インド研究センターは、「現代政治に生きるインド思想の伝統」をテーマに、非常に活発な研究活動を展開しています。このように、日本における南アジア地域研究の組織的推進において、長崎先生の貢献は多大なるものがあります。

以上のように、長崎先生の研究業績は、先鋭なる問題意識と広い視野そして着実なる研究に基づいた大きな学術的貢献として国際的にもきわめて高く評価されているだけでなく、日本における南アジア地域研究の発展のために、先生は、数多くの大型プロジェクトを組織され、共同研究推進、若手研究者育成、国際交流に関して献身的なご尽力をなされ、多大なご功績をあげられました。よって、長崎先生は、多年にわたって南アジア地域研究の発展に非常に顕著な貢献をなされており、本賞の受賞にふさわしいと考えます。

2011年度  
大同生命地域研究奨励賞

窪田 幸子 氏

(神戸大学大学院

国際文化学研究科教授)

## 略 歴

窪田 幸子(くぼた さちこ)

1. 現 職 : 神戸大学大学院国際文化学研究科 教授  
〔勤務先電話番号 078 (803) 7456〕
2. 最終学歴 : 甲南大学大学院博士後期課程退学 (1988 年)
3. 主要職歴 : 1994 年 大手前女子大学文学部専任講師  
1997 年 広島大学総合科学部助教授  
2006 年 広島大学大学院総合科学研究科助教授  
2009 年 神戸大学大学院国際文化学研究科教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
  - ①『社会変容と女性—ジェンダーの文化人類学』(共編著)〔ナカニシヤ出版, 234 頁, 2000〕
  - ②『多文化国家の先住民—オーストラリア・アボリジニの現在』(共編著)〔世界思想社, 304 頁, 2003〕
  - ③「「ファースト・ピープルズ」をめぐるパラドックス」(前川ほか編)〔『ファーストピープル』明石書店, 59~77, 2006〕
  - ④「先住民社会の変化と女性」(スチュアート・ヘンリ編)〔『文化人類学研究』放送大学, 169~186, 2006〕
  - ⑤『アボリジニ社会のジェンダー人類学—先住民・女性・社会変化』〔世界思想社, 253 頁, 2006〕
  - ⑥「神話と土地をめぐる地域の語りとその変化—オーストラリア・ヨルング女性と先住権原」(田中ほか編)〔『ミクロ人類学』世界思想社, 191~214, 2007〕
  - ⑦「博物館の公開性をめぐる論理のアポリア—アボリジニの実践と調査者の関与」〔『文化人類学』70 (4), 484~502, 2007〕
  - ⑧“Planning the local museum —Anthropology and Art in the Post-modern Era”〔*People and Culture in Oceania, Vol.23: pp. 53-72, 2008*〕
  - ⑨「アボリジニ美術の変貌」(山下編)〔『資源化する文化』資源人類学 第二巻, 弘文堂, 181~208, 2008〕
  - ⑩「ジェンダー視点と社会問題の交錯—オーストラリア・アボリジニ」(宇田川ほか編)〔『ジェンダー人類学を読む』世界思想社, 195~212, 2008〕
  - ⑪『「先住民」とはだれか』(共編著)〔世界思想社, 352 頁, 2009〕
  - ⑫「「オーストラリアの長い沈黙」ののち—歴史とアボリジニのエージェンシー」〔『文化人類学』73 巻第 3 号, 400~418, 2009〕
  - ⑬『オセアニア学』(共編著)〔京都大学学術出版会, 569 頁, 2010〕
  - ⑭“From Applied Anthropology to Anthropology of Engagement”, in Musharbash and Berbar, eds., *Ethnography & the Production of Anthropological Knowledge*〔ANU E Press, pp.123-132, 2011〕
  - ⑮「アボリジニ・アーティストの誕生」(松井ほか編)〔『グローバリゼーションと〈生きる世界〉』昭和堂, 339~387, 2011〕以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 2002 年 博士(社会学) (甲南大学)

## 業績紹介

「アボリジニ研究の新たな展開と「先住民」研究の構築への貢献」に対して

紹介者： おおつか 大塚 りゅうたろう 柳太郎

(財団法人自然環境研究センター 理事長)

窪田幸子氏は、オーストラリア・アボリジニ社会の調査研究において、地域コミュニティの一員として受け入れられ、長期にわたる参与観察に基づき、現代アボリジニ社会の実像を明らかにし多くの学術書及び論文を発表してきた。また、同氏はアボリジニ社会における研究成果を基軸にしながら、世界各地の「先住民」とよばれる人びと、あるいは彼らの社会に関し、学術的のみならず社会的な理解の促進のための研究・啓発活動においても先導的な役割を果たしている。

窪田氏は、甲南大学大学院博士後期課程に進学した 1985 年に、指導教員であった精神人類学者の藤岡喜愛氏の勧めもあり、国立民族学博物館で小山修三氏を中心に始められていた、オーストラリア・アボリジニ研究に共同研究員として参画した。同じ 1985 年に、同氏はオーストラリアのノーザンテリトリーに位置するヨルング社会で調査を開始している。その後、ヨルング社会の調査はほぼ毎年繰り返され、現在までの調査日数は約 600 日に及んでいる。なお、同氏は一貫して単独で調査を行ってきた。

オーストラリア・アボリジニの社会は、オーストラリアの中で開発の歴史が古く大都市が集中する東部や南部では早くから変容が始まったのに対し、開発が遅れているノーザンテリトリーでは伝統的な慣習などが相対的によく残されている。このようなアボリジニの社会は、人類学などの分野で古くから大きな関心が寄せられ、欧米の研究者を中心に数多くの研究がなされてきた。研究の主たる関心は、婚姻規則などの社会組織や神話・儀礼などを含む宗教・自然観に集中し、アボリジニの人びとが急速に変化する政治・経済・社会状況の中で暮らす現実に焦点を合わせた研究は比較的少なかった。

窪田氏は、ノーザンテリトリーのアーネムランドに位置するヨルング地域のアボリジニ社会において、ある家族の長女として遇されながら、ヨルングの女性たちの目線で、彼らの日常行動や人間関係あるいは思考過程に接してきた。同氏が調査を開始した 1980 年代ころから、オーストラリアの中でアボリジニ社会への見方が変化しはじめるとともに、アボリジニ社会自体も変革を目指す動きが活発化していた。このようなときに、窪田氏がヨルング社会において調査を継続的に行ったことが、それまでの人類学あるいは社会学研究で見落とされていた、住民自身による主体的な変革の実態の解明につながった。すなわち、同氏の著書や論文のタイトルにもみられるように、同氏はジェンダーの問題、多文化・多民族問題、被調査者と調査者との関係など、広い視野から現実を見据えるとともに、得られた知見の客観的な吟味を深めてきた。たとえば、女性たちが伝統的な慣習と葛藤しながら

ら、外部社会とも連携し進めてきた経済的な自立を含む新たな生活実態の報告とその文明的な論考は、窪田氏の独特な研究手法によって鮮明になった事例といえよう。さらに、同氏はアボリジニ社会の規範を理解した結果、彼らの規範は特異的なものではなく普遍的なものとして認識したと述べている。

窪田氏のもう1つの大きな成果は、オーストラリア・アボリジニの研究を基軸に据えながら、学術だけでなく社会的な関心が高まっている「先住民」研究を、地域研究の視点から構築するために努力してきたことである。先住民に対する権利の侵害や先住民文化の理解の欠如を反省する動きは、2007年の国連総会で「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が議決されたことにもみられるように、国際的に大きな潮流になっている。とくに最近では、文化や芸術分野にとどまらず、たとえば、地球温暖化防止や生物多様性保全などの環境分野でも先住民族の伝統的文化の有用性が評価され、国際会議などでも先住民族からの問題提起の重みが増すようになってきている。

このような国際的な動向のなかで、日本における先住民族に対する理解は残念ながら進んでいるとはいえない。この状況を打破するためにも、地域研究に従事する人類学者をはじめとする研究者が、歴史的・理論的な研究を深めるとともに、市民社会とのコミュニケーションを含む啓発的な活動を展開することは急務である。窪田氏は、この面で日本をリードする1人として活躍している。とくに、国立民族学博物館の共同研究「先住民とはだれか？—先住民族イデオロギーの潜勢的/顕在的形態とその社会歴史的背景に関する研究」（2004—2007年度）を代表者として組織したことは特筆される。この共同研究の成果の一部は、2009年に単行本として刊行されている。

窪田幸子氏は、オセアニア地域研究、ジェンダー研究、多民族・多文化研究、先住民研究などの視座から多くの著書・論文を著し、後進の研究者の育成にも大きく貢献している。

2011年度  
大同生命地域研究奨励賞

小林 知 氏  
(京都大学東南アジア研究所助教)

## 略 歴

小林 知(こばやし さとる)

1. 現 職 : 京都大学東南アジア研究所 助教  
〔勤務先電話番号 075(753)7169〕
  2. 最終学歴 : 京都大学大学院  
アジア・アフリカ地域研究研究科単位取得退学(2005年3月)
  3. 主要職歴 : 2005年 日本学術振興会特別研究員(PD)  
2007年 京都大学東南アジア研究所 助教  
現在に至る
  4. 主な著書・論文:
    - ①「カンボジア・トンレサープ湖東岸地域農村における生業活動と生計の現状 —コンポントム州コンポンスヴァーイ郡サンコー区の事例—」〔『カンボジア新時代』アジア経済研究所, 2004〕
    - ②“An Ethnographic Study on the Reconstruction of Buddhist Practice in Two Cambodian Temples: With the Special Reference to Buddhist *Samay* and *Boran*.”〔『東南アジア研究』42(4), 2005〕
    - ③「カンボジア、トンレサープ湖東岸地域における集落の解体と再編 —村落社会の1970年以降の歴史経験の検証—」〔『東南アジア研究』43(3), 2005〕
    - ④「ボル・ポト時代以後のカンボジアにおける農地所有の編制過程 —トンレサープ湖東岸地域農村の事例—」〔『アジア・アフリカ地域研究』6(2), 2007〕
    - ⑤“Reconstructing Temple Buildings in Post-socialist Cambodia: An Analysis of Village Buddhism after the Era of Turmoil.”, in Alexandra Kent and David Chandler eds., *People of Virtue: Reconfiguring Religion, Power and Moral Order in Cambodia Today* [The Nordic Institute of Asian Studies, 2008]
    - ⑥「ボル・ポト時代以後のカンボジア仏教における僧と俗」〔『〈境域〉の実践宗教 大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』林行夫編, 京都大学学術出版会, 2009〕
    - ⑦“The Reconfiguration of Cambodian Rural Social Structure: With Special Focus on the People called Chen and Khmae.” [Kyoto Working Papers Series on Area Studies No. 88, 京都大学東南アジア研究所, 2010]
    - ⑧「カンボジアとラオスの仏教」(吉田香世子と共著)〔『躍動する仏教 新アジア 仏教史第8巻 —スリランカと東南アジア—』林行夫編, 佼成出版会, 2011〕
    - ⑨『カンボジア村落世界の再生』〔地域研究叢書 23, 京都大学学術出版会, 2011〕
    - ⑩『市場経済化以後のカンボジア: 経済活動の多面的な展開をめぐって』(編著) [Kyoto Working Paper Series on Area Studies No.115, 京都大学東南アジア研究所, 2011]
- 以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 2007年 地域研究博士(京都大学)

## 業績紹介

「ポル・ポト時代以後のカンボジア農村社会を対象とした地域研究」に対して

紹介者： しみず ひろむ  
清水 展

(京都大学 東南アジア研究所 教授)

小林知氏は、1998年から3年半におよんだカンボジアでの研究留学・調査の成果を博士論文にまとめ(2007)、さらにそれを全面的に改訂して、本年2月に単著『カンボジア村落世界の再生』(地域研究叢書23、京都大学学術出版会2011年)として刊行しました。本書は、ポル・ポト政権崩壊後に初めて、長期滞在による綿密な調査を行い、ポル・ポト時代のカンボジア農村の実態と政権崩壊後の地域社会の再生過程の諸相を、豊富な一次資料を用いて明らかにした画期的な民族誌・研究です。

愚直なまでに実直誠実に、村人が生きた歴史と今ある現実とに肉薄しようとする小林氏の研究姿勢と、その成果である本書は、まさに日本の地域研究の特徴と強みを具現しております。欧米の民族誌は、理論偏重のゆえに、ともすれば理論に合致するような現実に関心を集中させ、取捨選択され再構成されて書かれます。それと異なり、本書は村人に生きられた世界そのものを総合的に把握し、理解しようとするチャレンジングな企てであります。その結果、500頁を超える大部な書となりましたが、まさに氏の知的苦闘の跡と輝かしい達成を証明する良書となっております。

カンボジア研究は、東南アジアを対象とした地域研究のなかで、もっとも立ち後れている領域のひとつです。アンコール遺跡を中心とした考古学あるいは文化財保護の分野については1990年代初めから研究蓄積があります。また、国際関係論や開発援助論の文脈では、カンボジアという国と社会が取り上げられることが、今日では珍しくなくなりました。しかし、十分な現地語の運用能力を有した研究者が、文献調査と聞き取りによって得た一次資料を用いて対象社会の人々の生活状況を考察する地域研究の視点と方法にもとづく業績は、このたびの小林氏の単著が公表されるまで、世界的に皆無と言って良い状況でした。実証的研究の空白が長く続いてきたため、カンボジアの社会と文化については固定観念による理解(誤解・無理解?)が氾濫しているのが世界的な状況です。小林氏のカンボジアの社会と文化に関する本書は、日本の地域研究が世界に誇りうる証であると確信しております。

小林氏は、1998年3月にカンボジア農村社会を対象とした文化人類学的研究のレビューと展望を行った論文で修士号を取得した後、松下国際財団の「松下アジアスカラシップ」の助成金を得て1998年11月よりカンボジアに約3年半留学しました。最初の2年間で文献資料調査を行うとともに、カンボジア語の習得に専念し、後半の1年半に農村での住み込み調査を行いました。調査地はコンポントム州コンポンスヴァーイ郡サンコー区で、その目的は、ポル・ポ

ト時代以後の復興過程と現状を、村落社会の編成、農地所有、生業活動、経済格差および宗教活動などの諸側面から総合的に捉えようとすることにありました。

その報告と分析・考察である本書は、三部 10 章から成ります。まず第一部「歴史過程を読み解く」では、集落と農地を対象として、ポル・ポト時代に生じた地域社会の変化を、20 世紀初頭以降の長期的な地域史のなかに跡付けています。次いで第二部「地域生活の基盤を探る」においては、生業活動を中心に人々の現在の生活を詳細に報告するとともに、経済格差に焦点を当てて地域社会における過去と現在の連続性を探っています。さらに、第三部「生活世界の動態に迫る」では、宗教活動を取り上げ、過去に生じた変化と現在の人々の生活とのあいだの関係性を問い直しています。本書の学術上の貢献は、冷戦体制のもとでは不可能であったカンボジア農村での長期定着調査にもとづき、内戦とポル・ポト政権の過酷な支配を経験した人々の生業活動と社会・文化の復興再生の歩みを詳細に跡付けていることです。とりわけ、人々が地域で築いてきた社会関係の持続を、内外の社会変化を背景としつつ地域の文脈から浮き彫りしたことにあります。

以下、本書の注目されるべき主要な評価の三点について述べます。

第一に、本書は、カンボジア社会の実証的研究の長い空白を埋める詳細な基礎的研究です。長期の現地滞在を方法とするカンボジア農村社会の調査・研究は、1960 年代後半にベトナム戦争が激化して以降、まったく不可能になっていました。確かに 1990 年代半ばからは、カンボジアに関する研究が急増しています。しかし、そのほとんどは開発援助政策に直結する応用研究であり、対象社会を、ポスト・ジェノサイド社会あるいは被災者社会として捉え、短期訪問調査にもとづく現状分析を蓄積することに終始してきました。また、ポル・ポト時代にみられた大量殺人の事実のみを取り上げて、加害者と被害者という構図でポル・ポト時代以後のカンボジア社会を論じる視点が、研究者やジャーナリストのあいだに広くみられます。加害者と被害者ともにカンボジアの人々を二分するこの視点は、クメール・ルージュの指導者を対象とした特別法廷の準備が 2003 年に始まり、人道に対する罪を裁く裁判が実施に移されている近年、ますます強く繰り返されています。

しかし、本書が解明しているカンボジア農村社会の現実には、加害者と被害者という安易な二項対立では理解が不可能です。なぜなら、調査地の多くの世帯は、親子や兄弟姉妹といった近しい親族のなかに革命組織への参加者とポル・ポト時代の犠牲者をともに含んでいます。さらに、内戦とポル・ポト時代における経験は、同一地域に住む住民のあいだでも個人ごとに大きく異なっています。外部者がカンボジア社会を論じる際に用いてきた被害者／加害者といったラベリングが、まったく適用できないのです。長期のフィールドワークによって住民と信頼関係を築き、彼／女らの語りに耳を傾けることで以上のような複雑な現実を解明した点で、本書は高く評価できます。

第二に、本書は、ポル・ポト時代以後のカンボジア農村社会の再生の基礎的な論理と実際の経緯を明らかにしました。学際的手法を意識して収集された集落の編成過程、農地所有、生業、経済格差および宗教活動に関するそれぞれ詳細で豊富な本書の基礎データは、カンボジアを研

究する他分野の研究者はもちろん、他地域の専門家にとっても、比較参照研究のための高い資料的価値を有するものです。そして、これら基礎データは、今日のカンボジア農村の人々の生活が、多くの点でポル・ポト時代以前の社会状況と連続性をもつものであることを明らかにしました。

ポル・ポト政権の支配は苛烈であり、国民の5名に1名が死去しました。しかし、その時代を生き延びた人々は、政権が崩壊した1979年に元の生活の場に進んで帰還しました。そして、同じく生き残った既知の親族や友人、隣人らとのあいだに社会関係を再び結び、内戦期以前の生活のなかで個々人が習得していた知識や技術、経験を活用し、生活の再建に取り組みました。この意味で、ポル・ポト時代以後のカンボジア農村社会の再生・復興が、決してゼロから進んだものではない事実を、本書は多様な事例の検討を通じて明らかにしました。

さらに、本書は、20世紀初頭以降、多くの中国人移民を受け入れて発展してきた調査地の地域社会の局地的な歴史経緯が、ポル・ポト時代以後の復興過程において、経済格差の再現という興味深い社会現象を生み出した原因であったことを実証的に跡付けています。この点は、各種の災害後の社会再生において当該社会がもつレジリエンシーがいかなる変化と持続を生み出すのかという問題に関する比較研究を進める上で、手堅い基礎となる成果といえます。

第三に、本書を独創的なものにしてしているのは、定着村のみならず、複数の集落を視野に入れて調査対象地域の歴史を浮き彫りにしたことです。とくに、数多くの口述資料にもとづく、集落ごとの強制移住の経緯とその後の集落の再編過程の考察は、内戦とポル・ポト時代を生き抜いた人々の行動を詳細に再現することにつながっており、本書の重要な基礎をなしています。そして、人々が集落を再編し、農地を再取得してゆく経緯についての分析は、妻方居住慣行をもつ地域社会において、妻方親族の紐帯が内戦の前も後もきわめて重要な機能を果たしていたことなどを明らかにしました。

本書には、ポル・ポト時代以後の社会再生の過程を具体的に示す、人々の生活の諸局面に関する基礎データのみならず、今後のカンボジア社会研究を推進させる上で基礎となる記述と考察が豊富にもりこまれています。定着村とその周辺地域の複数の集落のみならず、首都まで広がる人々の活動を追い、広範な地域社会の文脈のなかで照射したことで可能となった商業活動や仏教実践についての観察は、現代カンボジア地域社会の動態と変化を生き生きと伝えていきます。そして、社会の再生とは、過去に築かれていた社会関係や慣行を資源としつつ展開されるとはいえ、単線的に進むものではなく、行きつ戻りつ、さまざまな可能性を試みながら進められていることを明らかにしています。特に、ポル・ポト時代以後、国家権力によって制度的に統制の対象とされた宗教活動を中心とした文化再編の現場では、経済格差が広がる今日の社会経済的変化を背景としつつ、様々な矛盾と競合をはらんで再編が進行していることを、住民の日々の暮らしや寺院建造物の再建事業の記述を通して考察しています。

以上、概説しましたように、本書は、カンボジア農村の調査対象地域に暮らす住民の日常生活を構成する諸局面を、内戦以前の地域の歴史的な文脈と重ね合わせて分析することにより、ポル・ポト時代以後の地域社会の再生を立体的に跡付け、さらに現在進行している文化再編の動態も明らかにしています。地域が刻印する歴史経緯と動態のなかで変化しつつある現在の双方

を複眼的に捉えた本書は、地域研究の手法を用いた長期のフィールドワークの成果として、カンボジア社会研究の空白を補うにとどまらず、東南アジア社会研究にも新たな展望を拓くものと評価できます。

2011年度  
大同生命地域研究特別賞

藤村 靖之 氏  
(非電化工房代表・日本大学工学部客員教授)

## 略 歴

藤村 靖之(ふじむら やすゆき)

1. 現 職 : 株式会社非電化工房 代表  
〔勤務先電話番号 0287(77)3199〕  
日本大学工学部 客員教授  
〔勤務先電話番号 024(956)8600〕
2. 最終学歴 : 大阪大学大学院物理系専攻博士課程卒 (1973年)
3. 主要職歴 : 1973年 株式会社コマツ 熱工学研究室長等  
1984年 株式会社カンキョー 代表取締役  
1998年 株式会社非電化工房 代表取締役  
2008年 日本大学工学部客員教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
  - ①「金属固体の高速変形抵抗応力の速度依存性」〔応用物理学会誌, 1970年9月〕
  - ②「Dynamic response of solid」〔Int.Conf.of Appl.Mechanics, 1972年4月〕
  - ③「複雑系構造物の衝撃応力解析法について」〔応用力学連合学会誌, 1974年10月〕
  - ④「塑性域における動的応力測定法」〔日本機械学会論文集, 1978年9月〕
  - ⑤「ガスヒートポンプの開発と実証」〔空気衛生調和工学会誌, 1982年4月〕
  - ⑥『熱電併給の理論と応用』〔産業技術調査会, 1982年4月〕
  - ⑦『エンジン利用エネルギー機器』〔CMC出版, 1983年3月〕
  - ⑧『企業家は未来に点を打つ』〔エイチ・アンド・アイ, 1997年11月〕
  - ⑨『これでアレルギーは克服できる』〔かんき書房, 1996年9月〕
  - ⑩『さあ、発明家の出番です』〔風媒社, 2002年12月〕
  - ⑪『楽しい非電化』〔洋泉社, 2004年6月〕
  - ⑫『テクテクノロジー革命』〔大月書店, 2008年9月〕
  - ⑬『月3万円ビジネス—いいことで愉しく稼ぐ方法』〔晶文社, 2011年7月〕以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 1973年 工学博士 (大阪大学)

## 業績紹介

「地域環境を保全する経済の構築に関する貢献」に対して

紹介者： 小長谷 有紀  
(国立民族学博物館 教授)

藤村靖之氏は、これまで30年以上にわたり、健康や環境保全をテーマに、さまざまな発明とその事業化につとめ、起業家の養成にあたられた。とりわけ、非電化工房における活動は、さまざまな非電化製品の発明と普及によって、未来社会の設計におおいに寄与しており、国内外で高く評価されてきた。

たとえば、モンゴルでは、世界的に人口密度が低く、送電の施設整備がままならないため、電気をつかわず放射冷却を利用した冷蔵庫を開発し、その普及に努めた。また、ナイジェリアでは、政府の要請を受けて、現地のオレンジをジュースに加工する非電化工場を提案した。

こうした実践活動はいずれも、発展途上国が、これまでのエネルギー多消費型・化学物質依存型の技術にもとづいて先進工業国をあとおいくのではなく、環境保全型の経済を先端的に構築することをめざしている。すなわち、「リープフロッグ (leapfrog、蛙飛び理論)」の具現化にほかならない。

それゆえに、ODA や NGO の寄付行為とは異なり、ビジネスとして採算があうように工夫されており、サステナブル (持続可能性) な環境ビジネスとして提唱されている。このように、藤村氏の活動は、「地域環境を保全する経済の構築」に関して貢献するという点できわめて意義深い。

おりしも2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震に端を発し、福島第一原子力発電所の事故によって、将来にわたって深刻な被害がもたらされている。この東日本大震災は、エネルギーに依存しすぎる現代文明の問題点をあらわにした。わたしたちは現在、文明の転換期にたちあうこととなり、未来社会の新たな設計をする必要にせまられている。藤村氏の活動は、まさに、その先駆的事例として、今後ますます注目されるであろう。

また、藤村氏は、具体的な諸事例の実践にとどまらず、理論的な考察もともなっており、実践および理論の双方について、書籍やHP、講演会やワークショップなどで広く深く紹介している。

人材養成にも積極的であり、すでに、多くの弟子たちが、小水力発電、太陽光発電などの環境ビジネスを通じて、世界各地で環境保全型経済の構築に向けて貢献している。

以上のような理由で、氏の業績は地域研究特別賞に最もふさわしいものと判断される。

# 大同生命地域研究賞受賞者一覧

(肩書き等は受賞当時のものです)

敬称略

## 大同生命地域研究賞

1986年度	梅棹 忠夫	国立民族学博物館館長
1987年度	井筒 俊彦	慶応義塾大学名誉教授
1988年度	富川 盛道	富山大学教授
1989年度	石川 榮吉	中京大学教授
1990年度	増田 義郎	千葉大学教授
1991年度	伊谷 純一郎	神戸学院大学教授
1992年度	西田 龍雄	京都大学名誉教授
1993年度	川喜田 二郎	東京工業大学名誉教授
1994年度	加藤 九祚	創価大学教授
1995年度	樋口 隆康	奈良県立橿原考古学研究所所長
1996年度	佐口 透	金沢大学名誉教授
1997年度	佐藤 長	京都大学名誉教授
1998年度	本田 實信	京都大学名誉教授 名古屋商科大学教授
1999年度	岩田 慶治	国立民族学博物館名誉教授
2000年度	渡部 忠世	京都大学名誉教授 農耕文化研究振興会代表
2001年度	河合 雅雄	京都大学名誉教授 兵庫県立人と自然の博物館館長
2002年度	石井 米雄	神田外語大学学長
2003年度	辛島 昇	東京大学名誉教授
2004年度	篠遠 喜彦	ビショップ博物館上席特別研究員・ 前人類学部長
2005年度	細野 昭雄	在エルサルバドル特命全権大使
2006年度	池端 雪浦	東京外国語大学学長
2007年度	毛里 和子	早稲田大学政治経済学術院教授
2008年度	石毛 直道	前国立民族学博物館館長
2009年度	堀田 満	西南日本植物情報研究所所長
2010年度	応地 利明	京都大学名誉教授

## 大同生命地域研究奨励賞

1986年度	高谷 好一	京都大学教授
1987年度	石澤 良昭	上智大学教授
1988年度	佐々木 高明	国立民族学博物館教授
1989年度	板垣 雄三	東京大学教授
1990年度	田中 二郎	京都大学教授
	前田 成文	京都大学教授
1991年度	片倉 もとこ	国立民族学博物館教授
	大塚 柳太郎	東京大学助教授
1992年度	日野 舜也	東京外国語大学教授
	荻野 和彦	愛媛大学教授
1993年度	赤澤 威	東京大学助教授
	小山 修三	国立民族学博物館教授
1994年度	大貫 良夫	東京大学教授
	松原 正毅	国立民族学博物館教授
1995年度	西田 利貞	京都大学教授
	山田 睦男	国立民族学博物館教授
1996年度	友枝 啓泰	広島市立大学教授
	加納 隆至	京都大学教授
1997年度	福井 勝義	京都大学教授
	吉田 集而	国立民族学博物館教授
1998年度	掛谷 誠	京都大学教授
	秋道 智彌	国立民族学博物館教授
1999年度	古川 久雄	京都大学教授
	黒田 悦子	国立民族学博物館教授
2000年度	市川 光雄	京都大学教授
	染谷 臣道	静岡大学教授
2001年度	原 洋之介	東京大学教授
	松下 洋	神戸大学大学院教授
2002年度	片山 一道	京都大学霊長類研究所教授
	鹿野 勝彦	金沢大学教授
2003年度	家島 彦一	東京外国語大学名誉教授
	山田 勇	京都大学東南アジア研究センター 教授
2004年度	佐藤 俊	筑波大学大学院教授
	山本 紀夫	国立民族学博物館教授

2005年度	小杉 泰	京都大学大学院教授
	末廣 昭	東京大学教授
2006年度	印東 道子	国立民族学博物館教授
	山極 寿一	京都大学大学院教授
2007年度	大塚 和夫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長
	松田 素二	京都大学大学院文学研究科教授
2008年度	臼杵 陽	日本女子大学文学部教授
	島田 周平	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長
2009年度	小長谷 有紀	国立民族学博物館教授
	酒井 啓子	東京外国語大学 大学院総合国際学研究院先端研究部門教授
2010年度	井上 真	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	宇山 智彦	北海道大学スラブ研究センター教授

大同生命地域研究特別賞

1987年度	本多 勝一	朝日新聞社編集委員
1988年度	千原 大五郎	拓殖大学教授
1989年度	林屋 永吉	上智大学客員教授
1990年度	藤木 高嶺	帝国女子短期大学教授
1991年度	黒沼 ユリ子	バイオリニスト
1992年度	鶴見 良行	龍谷大学教授
1993年度	市岡 康子	日本映像記録センター プロデューサー・ディレクター
1994年度	並河 萬里	写真家
1995年度	高野 悦子	岩波ホール総支配人
1996年度	山口 吉彦	アマゾン自然館館長
1997年度	富田 浩造	元 JICA ザンビア所長
1998年度	向後 元彦	マングローブ植林行動計画代表
1999年度	大村 次郷	フォト・ジャーナリスト
2000年度	小貫 雅男	滋賀県立大学教授
2001年度	吉田よし子	食用熱帯植物研究者
2002年度	野町 和嘉	日本写真家協会会員・写真家
2003年度	中村 哲	ペシャワール会現地代表・PMS (ペシャワール会医療サービス) 総院長
2004年度	前川 健一	ライター
2005年度	松岡 環	アジア映画研究者
2006年度	大村 幸弘	中近東文化センター附属 アナトリア考古学研究所所長
2007年度	村井 吉敬	上智大学外国語学部教授
2008年度	嘉田 由紀子	滋賀県知事
2009年度	大石 芳野	写真家
2010年度	門田 修	海工房代表

以上